

教員養成担当教員による保育内容（造形表現）の実践

－事例の報告－

上山 浩*

Visual Art Activities for Infant Education by Teachers Educator

－Report of Some Specific Cases－

UEYAMA, Hiroshi*

要 旨

本稿は、これまでに、幼児の造形表現に関わる具体的な教育活動として、筆者直接関わった活動についてその実践報告の形にて提案を行うことを内容の中心とする。具体的には、年長児2クラスの合同にて行なった「芋ほり」の経験を基にする複合的な描画活動、任意参加の未就園児を対象とする手足に直接絵の具をつけて行う描画活動、年長児2クラスにて個別に行なった多量の水粘土を用いた造形活動、の3件を報告する。

キーワード：保育内容、幼児造形、描画、手足による描画、粘土表現

1. はじめに

筆者は、これまでに、前任校の宮崎大学教育学部（幼稚園教員養成課程）にて1989（H.1）-1995（H.7）年度の間に「図工Ⅱ（幼児の図工）」および「表現Ⅱ（絵画・製作）」を、また非常勤講師を兼務した鈴鹿医療科学大学保健衛生学部医療福祉学科（保育士養成コース）にて2008（H.20）年度-2012（H.24）年度に「造形（図画工作）」を担当した。

今般、本学部（三重大大学教育学部）にて2023（R.5）年度より、幼稚園教諭の教職課程にかかる「領域に関する専門的事項」のうち「表現」に関する授業科目を担当するにあたり、これまでの研究・実践を振り返り、現場に即した新たな教育内容を構築することの一助とすることとした。

特に本稿は、これまでに、幼児の造形表現に関わる具体的な教育活動として、本学附属幼稚園にて筆者が直接関わった活動について、その実践報告の形にて活動の提案を行うことを内容の中心とする。

具体的な内容は、年長児2クラスの合同にて行なった「芋ほり」の経験を基にする複合的な描画活動、任意参加の未就園児を対象とする手足に直接絵の具をつけて行う描画活動、年長児2クラスにて個別に行なった多量の水粘土を用いた造形活動の3件となる。

なお、本稿は、過去に筆者が公表した稿¹⁾を改めて検討し、改変・補填した箇所を含むものである。

2. 2008 年度実施 附属幼稚園年長組合同造形表現指導

2.1 実施に到る経緯

* 三重大大学教育学部美術教育講座

筆者には、30年ほど以前に中学校での教員の経験がある。だが、その以前やその後しばらく間も小学生や幼稚園児を対象にした教育活動の経験はなかった。そんな中、2005年度に、本学部の教育実習のあり方検討研究の事業として、本学附属小学校での事業実施が可能な状況が作り出され、筆者は、小学校5年生を対象にした授業を実施する機会を得た。この5年生という学年は、筆者が教職経験をもつ中学生に近い年齢層であり、過去の経験が比較的生かしやすいと考えたからでもあった。また2007年度には、小学校2年生の図工の授業の、とくに共同制作を取りあげた授業を実施した。上に示したように、それまでに、筆者には低学年の児童の授業を担当した経験が無く、児童への対応に判断の遅れるような事態も想像でき、多くの不安を感じてはいたが、当該学級の担任の先生の熱心なサポートを頂き、無事、授業目的を達成することができた。

2008年度には、附属幼稚園から1件（年長組）、附属小学校から2件（第1学年、第5学年）、それぞれ造形表現に関しての連携教育活動のオファーがあった。中でも附属幼稚園には、兼ねてから筆者は取材を依頼しており、当時の北谷副園長および当該クラス担任の杉澤教諭（現副園長）より、多くの支援をいただいていた。また筆者自身も、幼稚園での教育活動の経験が無いことから、低年齢児の造形指導の実践的理論を強化したいと考え、まず、附属幼稚園での教育活動に取り組むこととした。

2.2 実施活動の概要

2.2.1 実施日までの経過

本報告の対象である附属幼稚園での教育活動の実施にかかわり、附属幼稚園より要請を受けた研究連携の内容は以下のとおり。

- ・対象幼児：5歳児（さくら組・うめ組（杉澤教諭・早川教諭（現教頭）担任クラス））
- ・内容：描画を中心とした表現活動

そこで、具体的な実施に向けて、10月21日に附属幼稚園にて、杉澤教諭との事前検討を行った。その場で、杉澤教諭より実践を踏まえた鮮明な問題意識をうかがうことができた。当日、杉澤教諭より示されたメモを、筆者の責任で抜粋要約し以下に示す。

- ・年長児の描画活動において「子どもが楽しく、自由に描く」とことと教師側のねらいとのバランスをどうとるか。
- ・言葉を掛けすぎると「楽しくいきいきと描く」面がしばむことがある。かといって言葉を掛けずに「自由に！」というのも、それでいいのかと迷う。
- ・この時期の子どもの絵を、どのように見て、どこを大事にしたらよいか迷う。自由にのびのびと描いているところを認めたいが、「運動会の絵を描こう」などのテーマを与えたときにそれから離れた絵を描く子どもにどう声をかけるか迷う。
- ・キャラクターのイラストのような絵は描くが、描いたことがないものや実際の様子になるべく近づけて描くことができない子どもにどう対応したらよいか。
- ・5歳児でも頭足人を描く子が多い。描く経験が少ないのだろうか。
- ・じっくりと取り組むことが苦手、早く仕上げようと雑になりそれでも平気、描いたものの中に自分の気持ちがあまり入っていない、という子どももいる。

これらの問題意識に沿って、諸課題の解決を目指した具体的な造形活動を立案し実施することとした。そして、この時期の楽しいイベントの一つである「芋ほり」のイベントとリンクした造形活動を企画し教材研究を進めることとした。以下に経過を示す。

- ・事前の教育活動参観と実施造形活動の概要について、電子メールにて打診した。
- ・上記について杉澤教諭より返信があり、参観の日程を調整、造形活動題材を選定した。
- ・附属幼稚園の通常の教育活動を参観した。

- ・対象年齢幼児の技能や興味関心を調査し、活動の概要を決定した。
- ・指導案の第1次案を作成し、幼稚園に検討を依頼した。

この間に、筆者指導の大学院生と共に以下の点を中心に教材研究を行った。

- ・表現材料の検討
（黒画用紙を基盤とする。色画用紙切って貼る（配布法）。クレヨンで描画する。）
- ・作例の制作
- ・附属幼稚園の「芋ほり」の活動【図1】を参観した。
- ・指導案の第2次案を作成し、幼稚園に検討を依頼した。
- ・附属幼稚園にて事前検討会を実施した。
（参加者：北谷副園長、杉澤教諭、早川教諭、筆者）
- ・実施日を決定した。
- ・表現材料を確認し、手配した。
- ・表現活動の開始に逡巡する可能性のある幼児の存在を共通の認識とした。
- ・さくら組・うめ組合同（約60名）の活動とすることとした。

この間：以下を検討した。

- ・動機付けとイメージ喚起に演出用の小物を用いること。
- ・活動の導入に制作過程の一部などの実演を挿入すること。
- ・板書（文字）使用（杉澤教諭に打診）。
- ・指導案の第4次案を作成し、幼稚園に検討を依頼した。

2.2.1 実施当日の概況

当該の教育活動は、11/18の10:30より実施した。実施に際し事前に幼稚園にて材料などの準備を得た。活動全体の進行や導入は筆者が担当し、適宜個別の指導は、附属幼稚園の杉澤教諭、早川教諭、北谷副園長の支援を得た。実際の指導活動は以下のメモに沿った形で行った。

附属幼稚園 年長組（さくら組・うめ組）合同描画表現活動

2008年11月18日

『土の中の「おいもさん」の生活』（想像して描く）

ねらい

○絵を描くことを楽しむ

〈どのような楽しさか〉

- ・描きたいと思うことがイメージでき、描きはじめることができる。
- ・描きながら、色々なことを思いつき、描きたいことが増える。
- ・描きながら、新たな描き方を思いつき、それ試すことができる。

題材観

○園児の様子

- ・個々に遊びたいことや遊ぶ方法をイメージとしてもっている。
- ・糊やハサミ使用の基本的スキルは獲得している。

【11/10の芋ほりの経験に関連して】



図1 芋ほり当日の様子

- ・大きな芋が沢山とれたことが楽しい経験となっている。
- ・土の中にあるものやいるものに関心をもっている。
- ・芋が土の中で育ってきたことに関心をもっている。
- ・芋の形を色々なものに見立てた経験がある。
- ・土の中を描いた作品に友達同士で関心がもてる。

○具体的活動

- ・「おいもさん」本体および「おいもさん」の生活にかかわるものを切って貼って描く。
- ・四つ切の黒色画用紙を台紙とする(土の中をイメージするために)。淡い色の色画用紙を数色分、適宜用意する。
- ・子ども達は、ハサミで色画用紙を切り、糊で黒画用紙に貼る。そして、クレヨンで、描きたいことを描く。

【園児の準備物：ハサミ、のり、クレヨン】

○導入の流れ

- ・芋をもって指導者登場。
- ・「皆さんはお芋を掘りましたね」
「お芋は土の中で育ちましたね」
「このお芋に目をつけて「おいもさん」になってもらいました」
- ・芋にシールの目をつける【図2】。

(腹話術風に)

「こんにちは、僕「おいもさん」です。僕は土の中で育ちました。僕が土の中でどんなな生活をしていたか分かるかな?」「土の中で、こんな生活をしていたらいいなと、皆さんが思う様子を考えてみてね。」【図3】

- ・少々やり取り
「僕には家族や友達はあるのかな?」
「僕はテレビを見るのかな?」
「僕はお風呂に入るのかな?」
- ・「と、ということで、土の中の「おいもさん」の生活を考えてみたいと思います。」
- ・白板に黒画用紙をはる。
「この黒い画用紙は土の中です。」
- ・色画用紙で芋のような形を切り黒画用紙にはる。
「「おいもさん」は土の中のどこにいてなにをしているのかな?」
- ・子ども達が思うことを聴いて、描いたり貼ったりすることを途中まで実演する。
- ・「皆さんは「おいもさん」が何をしているところ思い浮かべますか?」
- ・以下を板書：「おいもさん」が〇〇しているところ



図2 導入に用いた小道具



図3 活動の導入

ろをきってはってかきましよう

・「今から、一人一人、色画用紙を切って貼って、クレヨンで絵を描いてみよう。」

●目標達成に向けての指導は、基本的にこの導入のみと考える。園児の表現活動の（形成的）評価は「おいもさん」の立場から励ます要領で行う。

●子ども達は、日常の生活やあこがれる生活を「おいもさん」に転化すると予想される。

2.2.3 実施日以降の経過

当該活動の一週間後の11月25日、附属幼稚園にて、事後検討会を実施した。この検討会の目的は、「幼稚園での教育活動をより充実させるための知見を得るとともに、小学校教育も含めた美術（造形）教育のあり方や実施法についての知見を得る」というもの。参加者は、附属幼稚園から北谷副園長、杉澤教諭、早川教諭、杉野教諭、濱崎教諭、附属小学校から元水教諭、北山教諭、学部からは筆者となった。議論の流れは以下のとおり。

- ・今回の実践の経緯（議論の経過）と題材設定の意図の概略
- ・実施しての所感（反省）
- ・支援者・参観者の所感を中心としたフリーディスカッション

この検討会では、2時間以上にわたりきわめて活発な議論が交わされた。以下に、筆者判断で重要と思われる論点を記す。

- ・導入のみでは主体的な表現活動に至らなかった子どもに対し、活動中に行うべき支援はいかなるものか？
- ・このような支援は、概して、子ども主体的表現への道筋を奪うことにならないか？
- ・それを、単なる誘導に終わらせず、以降の主体的な表現活動につなげるにはどうすればよいか？

後日、筆者の依頼により、杉澤教諭と北谷副園長から詳細な所感を相次いで得た。筆者の責任で抜粋要約し以下に示す。

- ・子どもたちの気持ちが動き、揺さぶられ、イメージが沸くような導入が大切だということがとてもよく分かった。
- ・日常の保育の中では、「ひとつの活動について、しっかりとねらいを持ち、そのねらいの達成のための方法を深く考える」ということが希薄になりがちにある。これらについて再考できた。
- ・運動会の描画表現などの指導について悩んでいた。「ひとりひとりが伸び伸びと自分の表現したいことを表現する」ことの大切さを改めて感じ「そのために教師ができることは何か」を考えることの重要さを感じた。
- ・「絵を描く」あるいは「課題のある絵を描く」活動の導入の開発に興味を感じる。

（以上：杉澤教諭）

- ・板書の場面は、園児にインパクトがあった。子どもたちの絵の数点に文字が見られたがこの影響ではないか。
- ・「おいも」にする紙を多くの幼児が一斉に取りに行った。普段の活動では、混乱をさける指示をする。だがそれは意欲をそいでしまっていたのかも知れない。許される範囲で、子どもの「やりたい」という意欲の方向を支えたい。
- ・普段の活動では、のりを使う時は連鎖的にのり下紙の用意を考え、使っていない子どもには「のり下紙を使おうね」と指示するだろう。上山は、その点も鷹揚で特に注意しない方針だった。そのほうがのびのびと次の活動ができていた。低年齢児はのり下紙の使用は難しい。これを台紙と思う子どももいる。幼稚園の教師は、整然と幼児がのり下紙を用いる姿を理想として型にはめて安心しがちなのか

も知れない。それを基礎的な力と呼ぶのだろうか。

- ・「おいも」をどんな形に切り抜こうとしているか、個性が現れて興味深かった。普段、先を見通せるような子どもは芋の概念から離れられずに困っているようだった。
- ・上山は、「子どもはこう考えるだろうから、こうしてみる」と、子どもの行動の先を見通して指導方法を考えている。同じ筋道をとっても、私たちとは考えた結果してみせることが全く違う。我々：こうしてほしい見本を示してしまうのではないか。

上山：子どもたちが安易に考えそうなことを崩すという方法をとった。

- ・「子どもたちにこんな経験をさせるためには」と、いろいろな手だてを自身が楽しみながら考えていることが興味深い。子どもたちが内心から「描きたい」「つくりたい」と思って表現する。そのことを目指し、地道に教師が指導方法を考え、場をつくっていけば、必ず子どもたち自らつかんでいくようになると思っている活動や話だった。

(以上：北谷副園長)

3. 2018・2019 年度実施 附属幼稚園未就園児保育造形指導

3.1 実施に至る経緯

2018 年度の本学部、学部附属連携授業の一環として、本学附属幼稚園の未就園児保育（コアラの会）での造形活動指導の支援依頼を受けた。この未就園児保育は、ほぼ月に一回、定期的に行われるもの。事前に登録した幼児を対象に、保護者の同伴のもと、同幼稚園遊戯室にて指定時間内に任意にて参加する。この活動自体、同幼稚園の職員に加え園児の保護者等のボランティアスタッフの支援のもと実施されている。

実施内容は、当該年度までに附属特別支援学校にて行っている手足に直接水彩絵の具をつけ大きな紙に自由に描く活動である。本活動は、本学美術教育講座の関教授の支援を受け、複数年度にわたり実施し、毎年実施についての依頼を受けている。

2018 年 5 月の段階で、杉澤副園長より依頼を受け、その後、同氏とのメールのやり取りにて、実施に向けての詳細な打ち合わせを行なった。

3.2 実施活動の概要

3.2.1 実施日までの経過

本活動に用いる絵の具は、市販の学校用ポスターカラー。1 色 200ml 程度のチューブに入った 12 色セットを用いた。それを単独色として、ないしは混色として、適切なサイズの広口瓶にて適切な量の水にて適切な感触となるよう希釈したものを 15 色用意した。また、この絵の具を手足につけるための皿として、手足が無理なく収まるサイズの大型で白色の鉢受け皿を 30 枚を用意した。以上を前提に、この活動に参加予定の児童の様子に沿った活動を設計することとした。

7 月 17 日（2018 年）に、実際の未就園児保育の活動を参観した。最大で 25 名の幼児とその保護者 25 名の併せて 50 名が参加する状態についてのイメージを得た。実施の形態は、遊戯室内を 5・6 の区画に区切り、それぞれの区画に、幼児が主体的に遊びや創作が行えるよう教材や玩具、材料等が用意され、それぞれの区画にて、スタッフが幼児の安全確保や遊びを促すよう幼児に関わる形で運営されている。

このような状況から、実際の活動を設定するにあたって、子どもたちが、この活動の魅力を十分に楽しむことできる環境の設定にあたって、描くための大きな紙のサイズを十分に確保することとし、具体的には、12 枚の模造紙をつなぎ合わせることにした。

模造紙を用いるのは、比較的安価であるばかりでなく、表面が適度にコートされており、吸水性があ

まり高くないために、手足につけた絵の具が潤滑剂的なヌルヌル感を適度に保てるからである。通常、絵の具は、色彩という視覚要素を中心に表現に用いられるが、絵筆を用いず、手足を絵筆代わりとすることで、温度や肌触りなどの触覚要素が、表現者に直接感ぜられ、表現時の感覚の交錯などが生じやすくなる。

本活動では、活動する幼児の入れ替わりを想定して、つなぎ合わせた模造紙を2枚用意することとした。

8月27日（2018年）には、必要な準備物を会場（附属幼稚園遊戯室）に持ち込み、会場の設定を行なった。主に12枚の模造紙をつなぎ合わせる作業を行うとともに、本描画活動を行う区画の設定について検討した。幼児本人も保護者も安心して描画活動を行い、他の活動への移行のスムーズに行えるよう、当該区画を遊戯室の開口部の側に設定し、床面保護の養生シート上をすぐのところに洗浄スペースを設置した【図4】。



図4 配置と活動の様子（2019年度）

3.2.2 実施当日の概況

2018年度は、実施日を9月4日に予定していた。あいにく当日は台風の接近に伴い、前日にて9月11日への延期が決定された。延期日当日は、筆者は所用のため、活動時間には立ち合うことができず、早朝に綿密な打ち合わせを行い、実際の運営は、附属幼稚園のスタッフに委託した。後日、その活動の様子の子の報告を受けた。

2019年度は、2018年度の同様の準備を行い、9月10日に、筆者の立ち合いのもと実施することができた。

3.2.3 実施日以降の経過

2018年度の実施日当日の様子について、杉澤副園長よりメールにて受けた報告の一部について、筆者の判断で表現を調整したものを以下に記す。

- ・子どもたちは（保護者の方にとっても）とても楽しい時間を過ごすことができた。
- ・2枚目の紙での活動では、本当に興味を持った子が集中し、夢中になって楽しむ姿があった。
- ・1枚目とはまた違って、自分なりのイメージを持ちながらやってみたり、紙の上に垂らした絵の具を手のひらで伸ばしてみたり、色の変化を楽しみながらどろどろのめり込んで遊んでいる姿があり、見ている大人の方もその姿に感動したとのことでした。
- ・短い時間の中でも、子どもの成長の姿が見られ「上山先生にもこの姿を見ていただきたかったね」という感想も聞かれた。
- ・本当に良い時間を作ることができた。

尚、2020年度、2021年度にも同様に依頼を受けたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大リスクから、同年の実施は見送っている。

4. 2019年度実施 附属幼稚園年長組造形表現指導

4.1 実施に至る経緯

2019年度の本学部、学部附属連携授業の一環として、本学附属幼稚園の年長クラス担当の辻教諭と湯田教諭から粘土を使った造形活動の実施についての依頼があった。筆者は、幼児における触覚や重量感にともなう造形活動のポテンシャルについては関心を感じていたが、これまでに同等の活動の実施経験

がなかった。だが、本活の重要を鑑み、本学の他の教員の援助を仰ぎながら、どう活動を実施することとした。

4.2. 実施活動の概要

4.2.1 実施日までの経過

具体的な活動内容は、主に湯田教諭との間で7月より電子メールにて検討を始めた。当初、幼稚園側からは園に備え付けの油粘土を用いることを想定した相談を受けたが、筆者のこれまでの塑像作品制作の経験から、子どもたちには、美術を専門とする学生が塑像制作に用いる粘土、いわゆる水粘土を、しかもこれまでの活動で扱ったことのないような量を提供し、その素材感をもとにした活動を提供したいと考え、そのように提案した。

上記の提案に際して、当該の水粘土を大量に準備する必要が生じるが、このことについて、本学部美術教育講座にて彫刻を専門とする奥田教授に相談し、協力の快諾を得た。

奥田教授から提供を受けた水粘土は、信楽産の陶土を主材料にするもので、適切な粘度・可塑性を有するようにブレンドされている。奥田教授の日頃からの管理のもと、とても使いやすい状態のものの提供を受けた。粘土の量は、幼児一人につき5kg程度が行き渡るよう合計で100kg程度を準備した。

4.2.2 実施当日の概況

実施日は、1月20日【図5】、1月21日【図6】の2日間、年長児の2つのクラスにて、日を変えてそれぞれに実施した。それぞれのクラスは20名程度であるが、インフルエンザの流行に伴い、相当の欠席者が生じた。その活動の概況については、事項の報告内容に譲るものとして、下記のことを明記しておきたい。

本活動に用いた粘土は、実施両日に共通して同じものを用いた。両日間の保存に際しては、適量に分けて密閉して冷暗所に置いたが、両日間において、粘土の硬さや手触りに大きな差が生じた。その原因は、1日目の使用時間中の水分の蒸発にある。このことは、事前にある程度予測された為、1日目の使用の前には、若干柔らかめに調整したが、そのことがかえって両日間の差を際立たせることにつながったように思われる。その粘土の状態の違いが子どもたちの表現にどのような影響を与えたかは評価は難しいが、水粘土を用いた子どもたちの活動においては重要な考慮対象であることが実感された。



図5 1日目の活動の様子

4.2.3 実施日以降の経過

前項でも触れたが、実施日当日の様子について、事後に公表された早川教頭による報告²⁾の一部について、筆者の判断で表現を調整したものを以下に記す。

- ・[水粘土で遊ぼう]年長児 1月20日（月）1月21日（火）美術教育講座上山浩先生
- ・年長児が上山先生と一緒に、信楽焼にも使われる粘土を水で伸ばした水粘土に触れたり、遊んだりした。粘土は大きな塊で用意してもらったため、それだけでも幼児の目は輝く。幼児は持ち上げたり、転



図6 1日目の活動の様子

がしたり、足で踏んでみたり・・・。

- ・これまでの粘土と違って全身を使って楽しむ様子が見られた。
- ・ほとんどの子が裸足となって、粘土の上に乗る、体重をぐいぐいかけて沈んでいくときの感触、冷たさ、どんどん変わっていく形に心を動かしていた。
- ・友達と一緒に「山を作ろう!」「お寿司を作ろう」と大きいものを一緒に作る様子が自然と見られ、形が変わる面白さを友達と共有する姿もあった。
- ・今回は、年長児を対象としたが、年少児、年中児でも楽しめる題材であると感じると共に、このような普段できない体験ができることにもこの連携活動の意義を感じた。

尚、2020年度、2021年度にも同様に依頼を受けたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大リスクから、同年の実施は見送っている。

5. むすびに代えて

附属学校園での教育活動は、学部教員にとって実りの多い活動ではあるが、それ実際に実施するに際し、乗り越えなければならないハードルも少なくない。例えば「結果的に拙い教育活動になってしまふことへの懸念」「附属学校の流儀に合わせることの難しさ」などは、筆者自身も経験した。だが、これらはさしては問題ではない。

学部教員が附属学校園での教育活動を行うことは、単に学部教員が附属学校園教員の教育活動を代行することではない。これを行うには、学部教員が附属学校園の児童・生徒・園児の実態をよく把握し、その教育課程から細かな流儀までにも意識を巡らせる必要があるのは当然のことだが、附属学校園の教員にとっても、教育活動の受入に際し、諸事項の調整や準備、実施教育内容の検討とその支援など、多くの作業が生じることになる。これは、教育の理論実践における最も実質的なコラボレーションだと考えられる。学部教員にとっての附属学校園での教育活動の実施に伴う負担は決して小さなものではないが、それに引き替えて得ることは多大である。何より、子どもたちからわき上がるエネルギーを貰うことができる点は特筆に値する。

学部教員が附属学校園で教育活動を行うことについて、その具体的な意義は、それを行うそれぞれの学部教員にとっても、それを受け入れるそれぞれの附属学校園教員にとっても、あるいはそれを受ける附属学校園の子どもたちにとっても、立場や個人によって様々であろう。

筆者は、学部において、美術科および図画工作科の教科教育学の研究・教育を担当している。学生への指導内容は、教科の理念や原理あるいは歴史などといった机上で扱えるものに留まらず、教材開発や子ども理解さらには実際の指導に到る実践的なものを多く含んでいる。関連して、教育実習中の実習生へのアドバイスや研究授業の前後の指導は、重要な位置づけにあり、附属学校の研究会では、教育活動についての指導助言を求められることも少なくない。すなわち、当然ことではあるが、筆者の立場には、美術科および図画工作科そして保育内容「表現」の教育活動に関する専門家としての力量が求められている。

そのような位置づけにある学部教員として、まず、第一の責務となるのは、日々の研究から、かかる指導に必要な理論を構築することに他ならない。だが、その一方で、当該の理論と実践とを結びつける道筋を学生達や実践現場の先生方に委ねて、自らを評論家的な立場に置いてしまうのも責任を全うする道からはずれるものと言わざるを得ない。当然ではあるが、学部教員は大学生教育を行っているのであるから、それは教育実践の場だと呼びうるわけであるが、少なくとも、大学生の教育と、児童・生徒、園児との教育の質的な違いや共通点についての明瞭なイメージを持たないかぎり、教師教育を行う上で

の実践的な知の形成は難しい。我々の立場にとって、そのようなイメージは、いかなる源泉から生じるものなのであろうか。

註

- 1) 上山浩「幼稚園での教育活動を実施して-2008 年度実施 附属幼稚園年長組合同造形表現指導-」『「学部・附属連携授業」WG 研究-平成 20 年度-』2009 年, pp.24-31.
- 2) 早川ひろみ「今年度の幼稚園における連携活動について」『学部・附属連携授業研究-令和元年（平成 31）年度報告書-』2020 年, pp.32.